2025 年
7 月 5 日（土）
7 月 6 日（日）

2025 年度研究大会は、京都府京都市（京都橘大学）で開催されます

大会テーマは「文化・芸術とメディア――テクノロジーによる生産と消費のパラダイム・チェンジ――」

テクノロジーの変化は、いつの時代にも私たちの暮らしに大きな影響をあたえます。録音技術、録画技術が文化･芸術の生産と消費の形態を劇的に変化させたように、文化・芸術の領域も例外ではありません。

こうしたテクノロジーの変化として、近年最も注目されているのが、AI 技術の発展です。生成 AI によって描かれた絵画がコンテストで優勝してしまったことや、ハリウッドの映画俳優組合が AI 俳優の起用に制限を求めたことがニュースとなりました。現在、私たちの周りには、AI によってつくられた「芸術作品」がすでに数多く出回っています。

このように AI 技術の発展は、人間の労働それ自体が商品となる、あるいはひとつひとつが異なるために量産できないといった、ボーモルがコスト病の理論の中で指摘したような生産技術上の特徴をおおきく変えてしまう可能性があります。それがどのような結果をもたらすのかは、いまだ未知数と言わざるを得ません。

今大会の特別企画では、AI 技術の発展を手がかりに、テクノロジーの変化が文化・芸術の生産と消費にいかなる影響をあたえ、私たちの社会をどのように変えてゆくのかを考えてみたいと思います。

■特別企画

「文化・芸術とメディア――テクノロジーによる
生産と消費のパラダイム・チェンジ――」

第 1 部　基調講演

「文化・芸術の生産における AI の可能性と人間の役割（仮）」

登壇者（予定）：

松原仁氏（京都橘大学／人工知能学会元会長）

概要：

人工知能学会元会長で「TEZUKA2020」など文化・芸術に係わるプロジェクトにも係わってこられた松原仁先生に、現在、AI による文化・芸術の創造がどの程度可能になっているのか、逆にまだ AI にはできない部分は何か、AI が文化・芸術を生み出すようになったときに、それが文化・芸術を取り巻く経済にどのような影響を与える可能性があるのかなどにつて、豊富な実例を紹介しながらお話ししていただきます。

第 2 部　ラウンドテーブル

「まちに AI を実装する～文化とコミュニティの視点から」

登壇者（予定）：

松原仁氏（京都橘大学／人工知能学会元会長）
毛原大樹氏（アーティスト、「ベースドラム」メンバー／武蔵大学・京都芸術大学非常勤講師）
矢代真也氏（呉服メーカー「(株) 矢代仁」取締役）
河島伸子氏（同志社大学／本学会元会長）
モデレーター：小泉元宏氏（立教大学／プログラム委員）
司会:佐藤良子氏（静岡文化芸術大学／プログラム委員）

概要：

本ラウンドテーブルでは、松原仁氏による基調講演を踏まえ、AI をはじめとするテクノロジーがまちなかの文化・社会活動、伝統文化に関わる企業活動、さらには文化政策や公共政策の領域において、どのように活用されうるか、その課題は何かについて意見を交わします。

登壇者には、松原氏のほか、デジタルテクノロジーの知識と技術を生かし、さまざまなクライアントと協働して活動を展開するテクニカルディレクター集団「ベースドラム」メンバーで、アーティストの毛原大樹氏、同社

のクライアントとして実際にコラボレーションを重ねてきた、1720 年創業の呉服メーカー問屋の取締役であり編集者でもある矢代真也氏、そして、文化・芸術やコンテンツ産業に関わる公共政策研究の第一人者であり、本学会会長も務めた河島伸子氏をお招きし、多角的な議論を展開します。

「伝統と革新のまち」として知られる京都の事例を交えながら、人々の関係性構築、子どもの遊び、老舗企業による伝統の継承と刷新など、さまざまな領域における AI やテクノロジーの可能性について考察していきます。

■分科会など

今年度も、例年通り分科会ごとに計 23 本の研究・実践事例の発表が予定されています。

1 日目午前中は特別テーマ関連の分科会、2 日目午前・午後は会員企画を含む多彩な分科会で研究発表がおこわれます。

■懇親会およびエクスカーション

本大会では、1 日目ラウンドテーブル終了後の午後 5 時より京都橘大学にて懇親会（有料）をおこないます。

また、大会前日の 7 日（金）に、京都ならではのエクスカーション（有料）を予定しています。こちらは事前予約制となりますので、後日ご案内する詳細を確認の上、お申し込みください。

■宿泊に関して

京都市での週末の宿泊は観光シーズンであるかどうかを問わず混雑します。早めの確保をお願いいたします。